



ジョサイア・コンドル《三菱一号館南面立面図》  
1890年代前半、三菱地所株式会社所蔵

## 美術館に出会う街

三菱地所株式会社 美術館室 恵良 隆二

2年間に亘る本連載も最終回となります。都市開発や街のブランディングに携わっていた私が美術館づくりの仕事と出会ったのは50代半ばの頃でした。その後の10年間、様々な出会いや経験を通して美術館と街づくりを考えることになりました。街づくりは安全性、利便性、快適性といった機能面を整えることに止まらず、街の個性や文化を育む種を蒔いたら素敵なことだと思います。美術館づくりは、人間の精神や感性が生んだ芸術との出会いの場を創る魅力的で稀有なチャレンジの機会です。そこでは文化や芸術の多様性への寛容な姿勢を保ち、街で活動する人々の創造性発揮への期待感を抱いて取り組みたいと思いました。

地球上には様々な自然があり、そこで生きる生身の人間は厳しい自然との対峙の中で、自然と折り合う緩衝材としてのプリミティブな文化という衣を身にまとったのでしょう。そして、人間の営為の拡大は文化の更なる多様化と高度化をもたらし、その中から生まれた芸術は地域や時間を越えて、人々の心に通底する価値を有するようになったことでしょう。

西洋に生まれたミュージアム（博物館、美術館）は、近代日本にも導入されて現代へと発展してきました。ミュージアムは都市の変容や大災害との遭遇の試練も乗り越えて、普遍的な意義を獲得した社会的成果といえます。訪れた都市に美術館を見出すとき、美術館は都市の総合的な価値指標と

もなり得ます。

三菱一号館美術館（以下、当館）は、開館から5年半を経過しました。国内外の美術館との交流の蓄積と当館職員のノウハウの習得は、当館の未来への財産となることでしょう。そして、美術と社会をつなぐ美術館の触媒的な役割を考えると、取り組みを強化しているエデュケーション（啓発・普及・教育）活動が重要な機能を担います。丸の内の就業者や一般社会人をターゲットとする鑑賞会やトークイベント、そして次代を担う子供たちへのアプローチ等、様々な試行を行っています。当館特有の街と連携する美術館システムが、一味違ったエデュケーションの成果を上げることが期待しています。

美術館の未来は、美術と社会との関係の中にあります。そこでは経済性評価の視点と共に、長期的に形成されるブランド価値の卓越性を視野に置いた美術館活動が望まれます。当館の展覧会の開催は、「丸の内の三菱一号館美術館」というブランドに様々な側面から魅力的なチャレンジを積み重ねていく上での中核的な活動として取り組み続けていきます。

最終回は、いささか勝手な想いを記しましたがご容赦ください。また、皆さまが出かけた街の風景の中やネットサーフィンの途中で美術館との出会いがあれば幸いです。

「美術館のある風景」は本号が最終回になります。2013年10月号より2年間、24回にわたり連載いたしました。ご執筆いただいた高橋明也様、恵良隆二様に御礼申し上げます。